

日野原重明塾クリスマス例会

去る12月1日、別府市コミュニティセンター自主事業2019との共催で日野原重明塾クリスマス例会として、大分出身の講談師一龍斎貞弥さんの独演会とミニ講座を開催しました。会場は日本独特の講談ということもあり別府市コミュニティセンターの多目的ホール「芝居小屋」で開催。

我が国の伝統ある講談を何うに最適の会場になりました。

当日は同じ会場で日野原重明塾大分の場合外例会も開催。昼食を頂きながらの例会はまた楽しいものでした。

例会では今年開催した例会、音楽会、講演会、日野原重明塾フォーラム、恒例の宇佐安心院バス旅行、医学講演会など開催した12の行事を振り返って、会夫々に大きな意味のある行事であったこと、沢山のことを学ぶことの出来た有意義な一年であったことを共に喜びました。

また後半の自由発言では、近年の国際情勢の不安定さを受けて日野原先生のミッションを実現するための方法論として先の大戦の総括をいたしました。戦争が如何に世界の人々を不幸せにするか。戦後作られた国連憲章の前文にある「平和への誓い」を改めて考えたことでした。

午後2時から席を舞台に移して今日のメインイベント一龍斎貞弥さんの独演会開演。流石に大分の誇る講談師だけあって、会場から溢れんばかりの参会者。席はぎゅうぎゅう詰めで嬉しい悲鳴でした。

講談の前段は講談の歴史。戦後の混乱期に講談はよく聞いていたのに講談についての知識の無さに吃驚、歌舞伎は講談で読まれていたものでルーツは講談にあるとのこと。楽しみながら勉強が出来るとはこの上ないことです。なかでも心に響いたのは「講談は人生の見本」との読み。今日の演目の「忠僕直助」も人として心掛けねばならない「良く生きること」のお手本でありました。そう考えるとこの国では古来ギリシャの哲学者ソクラテスが生涯をかけて追求し続けた「よく生きること」を実践せねばならないと伝えてきたのではないかと思います。



会場芝居小屋

日野原重明塾クリスマス例会は「講談」で良き年納

12月1日（日）別府市コミュニティセンターで開かれた本塾のクリスマス例会は、大分出身の女流講談師一龍斎貞弥さんをゲストに意義ある伝統文化に触れるひと時となりました。貞弥さんの経歴や当日の演目は会員の皆さんには本紙前号で既にお伝えしていますので、ここでは当日のプログラム進行に添ってご報告致します。

一龍斎貞弥さん



独演会は14時から始まり、高座に登場した貞弥さんはそもそも講談とはどのような歴史と変遷があるのか約1時間にわたって興味深いお話をされました。講談は慶長年間に徳川家康が『太平記』など軍記物等を読ませたことから始まり、元禄あたりから町講釈として庶民に広がった日本の伝統芸能の一つで、張り扇で釈台を叩きながら独特のリズムで読むのが特徴。ちなみに落語は「噺（話）す」、講談は実際に読んでいなくても「読む」といいます。名人・上手が次々と現れた幕末から明治にかけて全盛期を迎え、この人気に目をつけて講談の速記本を出版したのが「大日本雄弁会講談社」後の「講談社」だそうです。

例を挙げれば『水戸黄門』や『大岡越前守』『遠山の金さん』等があり、他にもテレビや芝居でお馴染みの話しには昔の講釈師の手によるものが沢山あるとのこと。こうした講義ともいえる前説を約1時間近くお話しされることは通常めったにないことで、私たち参加者はラッキーな学習ができました。

その後いよいよ講談『忠僕直助』に入り、見事な講談口調で人の義理人情、忠誠心、思いやりの物語が展開していきました。

そして休憩をはさんで良き発声が出来呼吸法を指導してくださり、正に有意義なひと時でした。

今回の貞弥さんのこうした熱の入れ方は、日野原先生が生前お話しされていたソクラテスの「よく生きることを何より大切にする」という想いを自分の高座に重ねたかったからだそうで、本当に素晴らしい表現者でいらっしゃる実感しました。高田世話人代表もその気持ちをしっかりと受け止めたのでしょうか、第二部が始まる前に来場者の皆さんに日野原重明塾の幹が「よく生きること」で、そのために私たちはどのような活動をすべきかをわかり易くお話しされました。こうした文化企画は2020年も続けていきます。事務局



会場風景1



会場風景2

新型コロナウイルスの流行から新興感染症を再考する

2019年12月以降、中国を中心に世界各国から新型コロナウイルス関連肺炎の発生が報告されています。マスメディアを通じて新たな情報が連日報道されています。この原稿を収筆している間に世界保健衛生機構WHOは「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言しました。

この原稿がみなさんのお手元にある時点でこの新型コロナウイルス感染は更に猛威を振るっているのでしょうか？過剰に反応しすぎたのではないかと指摘もあった2009年に流行した新型インフルエンザの様に一過性に動揺を与えたのみで落ち着きを取り戻しているのでしょうか？後者であることを望んでいますが、現在の感染が急速に拡大している状態、発生原地の武漢の制御困難となっている状況を見ると、収束するのは容易ではない印象です。何れにしても、今の段階では、集積されたサンプルが少ないために、感染力の強さや致死率などに確たるデータがなく直近の予測すら困難です。

さて、今回新たな新興感染症が発生しましたが、新興感染症とは「直近30年間に新しく認知され、局地的あるいは国際的に公衆衛生上の問題となる感染症」と定義されます。これまでに30種類以上の新興感染症が出現していると言われています。抗生物質やワクチンの開発により感染症は制御できるものと楽観された時代もありましたが、昨今記憶に新しいSARS(重症急性呼吸器症候群)、MERS(中東呼吸器症候群)、鳥インフルエンザ、ジカ熱、SFTS(重症熱性血小板減少症候群)などが次々に発生していて決して楽観できません。

これらの新興感染症の多くに共通する特徴として、人畜共通感染である点があります。SARSはコウモリとハクビシン、MERSはコウモリとラクダ、ジカ熱は蚊、SFTSはダニ、今回の新型コロナウイルスもコウモリとの関係が疑われています。私たち人間は人間サイドで起こる問題については研究、治療を熱心におこない、結果としてワクチンの開発に成功した天然痘はWHOにより1980年に撲滅宣言が出されました。

しかし、天然痘を撲滅し得たのは原因となるウイルスが人のみに感染するものだったからです。人畜共通感染症の場合、例えば鳥インフルエンザであれば人間だけではなく鳥のインフルエンザ感染も断たねばならず完全に制圧することが困難な理由となっています。

森林の破壊で住処を失ったコウモリは食べ物を求めて他の土地へと移ります。他にも森林破壊の結果としてニパウイルス、ラッサウイルス、マラリア、ライム病など深刻な感染症が人間にも広まっています。24時間世界中を飛び交う飛行機に象徴される国境のない人の往来や人口の過密化によって、過去には風土病でとどまっていたであろう感染症が瞬く間に世界中に拡散します。温暖化によって病原体に感染した蚊やダニの生息地が拡大していくことも問題です。新たな感染症に対し、その都度、治療薬やワクチンの開発や感染予防策を講じることは無論必要ですが、そもそも、感染症の発症の原因とされる地球環境の破壊に対しての危機感を共有し、全人類的な環境保全に対する取り組みが必要です。

末筆になりますが、新型コロナウイルスは過去の感染症と同様に、高齢者や基礎疾患（高血圧、糖尿病、心疾患など）がある患者さんが重症化しているようです。

自分自身が感染しないように注意すると同時に、感染した者が他者に感染を伝播しないように細心の注意を払うことが大切でしょう。

第一呼吸器内科医長 末友 仁 医師

今後の予定事業

2月15日（土）例会 代表の挨拶と本年度の抱負

話題提供：阿南幸子さん

3月14日（土）美しく繊細なアコースティック音楽の世界

出演：アルゼンチンが誇るギターリスト レオナルド・ブラーボ
ラテンジャズの第一人者 赤木りえ

会場：プチ・アリサ 詳細はチラシをご覧ください。

4月18日（土）例会 皆で語り合おう「日野原先生に学ぶ命の尊さ」

5月～6月 映像で学ぶ「日野原イズム」

心を潤す文化 一龍斎貞弥「二孝女物語」

2020年主要企画＝平和を推進するための文化事業（開催地 沖縄）

語りと音楽、舞踊で綴る「対馬丸からのメッセージ」公演

編集後記

昨年12月1日に行われたクリスマス例会で伺った、大分の誇る講談師一龍斎貞弥さんの講談は素晴らしいものでした。講談の歴史から始まった語りは教育の場であり、講談が「人生の見本」という言葉がソクラテスのよく生きることによりオーバーラップして感銘深いものでした。

P. 3には昨年12月以降中国を中心に世界に広がった新型コロナウイルス関連肺炎に関して時をかわさず皆様に情報をお知らせすべく、新興感染症についての解説と現時点での対応についての呼吸器専門医による寄稿です。毎日の様に速いスピードで変化する病気についてご理解の一助になればと思っています。

日野原重明熟の本年度の予定事業では「日野原先生を学ぼう」をテーマに勉強会を予定しています。

また国際的に活動을続けておられる高名な音楽家の方々による音楽を楽しむ会。

そして本年度最大の事業である「対馬丸からのメッセージ」沖縄公演を成功させるべく準備に大奮です。